

さながら府県の農村風景を思わせた。また家屋の体裁も府県に勝るところがあつても決して劣るようなことはなかった。

その他例外として二―三の村落があつたが、それを除くと、農家の柵屋は一村の中で数戸、あるいは全然なく、すべて草葺の堀立小屋で、適宜物置小屋や廐等がこれに附属していた。

なお小作人に至っては、多少の余裕のある者でも定住の念が乏しかったから金銭を住居に費すことをいとう傾向があつた。アイヌの木造家屋は平取村に十余戸を数えたが、その他は一部落に二―三戸もしくは全く柵屋はなく旧態依然として茅屋に起臥しているという状況であつた。しかしながら、床板を敷くもの等が漸次増加してきて住居の改良を示す傾向に進んだ。(前掲書準拠)

5 日高農業の前進

北海道殖民状況報文には明治三十年頃を中心に標題について次の如く誌されている。

「当国は他の諸国に比すれば広大なる原野なく、且その農業適地は早く開拓に着手せられたるを以て、今や大低賃付地又は私有地となりて残る所僅少なり。

而してその貸附中にして未だ開墾せられざる地、宮内省にて将来解除せらるべき地、高原にて漸次開墾せらるべき地等点々存在するが故に、尚農民の移住を要する雖も、その地積は何れも広からずして、一處に数十戸の団体を入るべき余地あるを見ず、且高原の如きは地味劣るを以て急に開拓する能はざるの事情あり。故に今後著しき移住開拓の業を見る能はずと雖も、尚年々移民を加え墾地を増すは明かなり。

河畔膏腴の地は開拓年久しく地味漸く衰えて、最初一反歩穀菽二石の收穫ありし地も数年にして一石五斗となり、又数年にして一石に減ず。而して農家は尚施肥を怠り、徒らに耕作地積を広くして産出を増さんと務むるは前に述ぶる所の如し。

斯る景況にて推移せば、地味は今後益々疲瘠して殆んど底止する所を知らざらんとす。

施肥のことは実に将来の一大要務と謂はざるを得ず。

また、農家が重にも大豆、小豆を作りて適當の輪作をなす能はざる事も亦地味を衰へしむる一原因なり。

且斯く作物の種類単調なるときは、一朝凶作に逢えば大なる困難を感じるの憂あり。

更に適當の農作物を輸出してこれを交へ作ること肝要ならん。

その他農馬の飼養に注意すること、副産物を増加すること、害虫を駆除すること、冬期業を設くること、水害を防禦すること、農

家經濟を改良すること等皆今後の要務たり。

蓋し当国主要の原野は、既に開墾創業の時期を了り、当に整理守成の時代に属す。将来大に注意して従来疎放の風習を改め、集約の經濟をなさざる可らざるは自然の順序なり。」

四 畜産の推移

1 概況

本道の自然は大きく百万町歩という放牧適地の草原がある。北国といえ降雪量も本州日本海沿岸地方に比べて少なく、そのうえ飼料作物の栽培適地も多いので畜産北海道として全国的に定評がある。

殊に太平洋沿岸地方においては氣候的条件から年間放牧が可能である。しかし本道農業は広い面積を短期間に耕さねばならぬ自然的地理的制約があるため、労働力の増進を図って作業能率をあげるために畜力は絶対に必要である。さらに有機質肥料としての堆厩肥の施肥が農耕地の地力を大きく維持培養するため、畜産は本道農業経営と固く結合しなければならぬのである。早くからアメリカの産業経営方式を導入したのもそのためで、この方式は畜力馬耕作業による牛の飼養を主とするものであった。

さて本道が我が国の主要な畜産地帯として発展していく基礎は開拓使時代に培われる。

明治五年の新冠牧場の開設をはじめ九年札幌に養豚場、牧牛場を官設家畜の改良に努力した。また官業としての牧畜経営とともに民間牧畜の奨励にも本腰を入れた。同九年牡馬去勢の論議が發布されたり、同十一年「牛馬羊豚貸付仮規則」などを設けたことなどはそのあらわれである。日高地方など小規模ながら牧場ができたのはこの結果である。

ともあれ開拓使当時黒田次官が欧米を視察して数種の家畜を輸入し、アメリカ人を招いて新しい農法を学ぶようになると、家畜の品種は増加し改良効果が次第に挙ってきた。

明治十三年浦幌郡の開懇を目指して赤心社が設立され、同十五年沢茂吉の元浦川に移民団を率いて移住による開懇と牧畜経営は浦河地方の先鞭をつけたものと言えよう。

この年から三県時代に入るが、この時代は本道の牧畜は保守的で種畜の輸入もなく大きな発展は見られないが、ただ明治十七年には新冠牧場が帝室御料地に編入され優良な種馬牧場となり、本道の家畜飼養数もこの時代に年々増加し、明治五年馬九、二九一頭、

牛二九五頭がこの時代の終期十八年にはいずれも四倍以上の数を示すようになった。このことは次の片山敬次「北海道拓殖誌」によって明らかである。

種別	年代			
	明治五	〃 一〇	〃 一五	〃 二〇
牛	牝 二〇八頭 計 八七	牝 四三二頭 計 七四五	牝 五四一頭 計 四五四	牝 八五一頭 計 四八六
	牝 二九五 計 八七	牝 一、一六七 計 七四五	牝 九九五 計 四五四	牝 一、三三七 計 四八六
馬	牝 五、二八一 計 四、〇一〇	牝 一七、二六四 計 一三、三二四	牝 一八、三〇三 計 一四、九九八	牝 二一、五九〇 計 一七、九七〇
	牝 九、二九一 計 四、〇一〇	牝 三〇、五七八 計 一三、三〇一	牝 三三、三〇一 計 一七、九七〇	牝 三九、五六〇 計 一七、九七〇

明治十九年北海道庁時代に入ると、真駒内種畜場においては種畜を移輸入して地方家畜の改良に大きな役割を果たした。

この年に赤心社は牧畜の拡張をはかり、翌二十年には早くも牧畜業の基礎を確立した。新冠牧場に初めてサラブレッド種が輸入されたのも、日高産馬改良組合の組織も、下ヶ方の馬市開催も明治二十年のことである。

同二十年以後道庁は優良種牡馬の貸付を行ない全道的に馬種の改良がなされるようになった。

三石村大塚助吉が仏國産の種牡馬を購入して馬種改良に努めたのは明治二十二年のことである。

一方畜牛の改良も進展を見せ、在来種は次第にその数が減少し、そして乳用牛が進出し、やがて支配的な地位を占めるようになってきた。

明治三十四年赤心社は乳牛の飼養に方針を変更している。牛馬の改良は明治三十三年産牛馬組合法によって産牛馬組合組織が系統的になってから行われるようになったが、日高産牛馬組合も明治三十五年設立を見てその改良にのり出した。

静内に日高産馬共進会が開催され、赤心社が乳牛飼育を行なうためホルスタイン種牡牛を購入してその生産を図り、さらに真駒内からの種牡馬の購入及び附与によって荻伏村軽種馬生産の緒口を開いたのは、すべて三十五年から三十九年までになされたことであつた。

た。

この間三十七年の札幌における北海道畜産共進会、去勢法の断行による馬格の改良、三十八年の輸入牡牛補助規程、産牛馬組合補助規程の制定、三十九年の農商務省牡馬臨時貸付規程、農商務省月寒種牛牧場の設置、第一次馬政計画制定実施などこれら畜産に関する改良生産奨励の諸事項は知っておかねばならない。明治四十年日高種馬牧場が設置され、馬匹の改良と馬産振興を推進することになる。

四十一年には産牛馬組合連合会が設置され、また畜産馬匹共進会が札幌で開催された。

四十三年には家畜市場法が制定された、日露戦後乳肉の需要の増加が甚しく牛の飼養も最高に達した。

2 軍需と馬産

北海道の農業が大きく転換したのは明治十九年の道庁設置以来のことで、大農経営の扶植を計画してこれに着手しようとしたことが非常に目立ってきた。前者については官庁の試験機関、牧場などの施設をして縮小又は廃止の方向を辿らしめるに至ったが、しかし明治二十年に新冠牧場が宮内省の所管となってサラブレッド種がはじめて輸入されるに至ったし、後者については十九年に「北海道土地私下規則」が施行されたため大土地所有の道も漸く開かれた。殊に家畜の力点が、これまでの牛から馬へ移行したことは極めて重要なことで注目すべきことであつた。

このことは、世界各国の軍備増強の動きが、次第に火砲・軍馬に向けられたのに対応する我が国の軍備強化の動きと軌を一にするものであつて、軍馬の必要性が認識されるとその需要が拡大され、それに伴って明治二十年以降民間の所有馬の増殖がはかられるようになった。日高においても、三石村大塚助吉はこの情勢に即応して、明治十九年道産繁殖牡牝六十五頭の飼育をはじめた。

所有馬の増殖の動向は、日清戦争による軍馬の需要増加による馬の飼育の発展を契機として、一層推進され、北海道も三、〇〇〇余頭の微増に応じ、馬産地としての地位を築き、やがて奥羽地方を圧倒する馬の供給地として前進するのである。明治二十七年の軍馬育成所の設置をはじめ、三十年の軍馬預託規則の制定、三十六年の軍馬補充部の設置、三十九年の種馬牧場並びに種馬所設置などは、総べて軍馬需要に対する一連の画期的な政策である。なお三十年の中央種馬廠の設置も牧草、野草、燕麦の購買開始も同様の方策である。

ここに日清戦争前後の日高の馬の数及び日高馬市累年馬匹驛売表を掲げて置く。

明治三十一年日高馬市会社驛売表

種別	性	馬数	同代価	一頭		代価
				最高	最低	平均
三回雜種	牝	三頭	一三四四〇〇錢	五〇〇〇〇錢	四二四〇〇錢	四四四六七錢
二回雜種	牝	一	七〇、〇〇	一五〇、〇〇	二〇、〇〇	七〇、〇〇
一回雜種	牝	一四	五九二、〇〇	五五、〇〇	一七、五〇	四二、三二
一回雜種	牝	一二	一九六、一〇	二一〇、〇〇	五七、一〇	九九、六七
一回雜種	牝	一一	一一二、四〇	一五〇、〇〇	二〇、〇〇	五〇、五六
一回雜種	牝	一五	一二六、五〇	一三六、〇〇	三五、五〇	八四、一七
退却雜種	牝	一九	七七七、七〇	四五、〇〇	三八、〇〇	四〇、九三
内國種	牝	八六	二、三三一、二〇	六五、〇〇	一〇、〇〇	二七、一一
内國種	牝	八九	二、五九五、〇五	六五、〇〇	一一、〇〇	二九、一六
計	牝	一四四	四、九四七、八〇	一五〇、〇〇	一〇、〇〇	三四、三六
計	牝	一四五	六、九九一、四〇	二二〇、〇〇	一一、〇〇	四九、四六

明治十九年に赤心社は牧畜を始めた。二十年には日高各郡に産馬改良組合を設けて馬種の改良を奨励するとともに洋種の種牡馬を貸与したり馬市を開催した。この年に道庁より種馬「アルゼリ」の貸与があった。二十一年には馬の販路の拡張並に馬産の改良に資する目的で、道庁の補助をうけ資本金一千百円で下々方に日高馬市会社が設けられた。この馬市には御料牧場下馬も委託され非常な活況を呈し、苦小牧の馬市はこれがため閉鎖の止むなきに至ったと云う。此の頃より牧場を出願するものが漸く多くなり、牧草の栽培も盛んになった。日清戦争以後は一層心を牧畜にかたむけるようになったけれども、既に放牧すべき余地がなかったので非常に苦しんだと言われる。

左表により明治十年以来十ヶ年毎の日高管内の馬の増減を見よう。

年	民間		新冠牧場		計
	牝	牡	牝	牡	
明治十年	一、一二〇頭	八八八頭	二、〇〇八頭	一、一九五頭	七四二頭
二十年	六、八二七	四、八一六	一一、六四三	七八六	一、二三三
三十年	五、四九七	四、〇〇一	九、四九八	一、四七六	二、一二八

新冠牧場は、最初から馬匹の改良を目的として南部種馬を購入し、又洋種を入れて漸次改良をはかってきたが、民間においては初めはただ飼育が容易であつたため、殆んど無目的に繁殖させるという状況にあつた。従つて馬も劣等で値段も安かつた。けれども販路が広まるに従つて改良の必要を痛感して、漸次良馬を生産するようになった。

このように改良を加えた結果は、需要の増加に伴つて次第に馬価を騰貴させるようになり、特に二十八年軍馬徴発以来は著しくその価格を増した。

軍馬徴発に絡まる話題

その(一)……日清戦後に本道から徴発された軍馬は三千余頭を数え、本道の馬匹は減少したが、軍馬としての価格は高く評価され、これが戦後の産馬事業に良い結果をもたらした。

その(二)……戦争によって様似ではじめて軍馬を徴発されたが、この老米を担ったのは矢本家であつて一門の名譽としたものである。その(三)……新冠郡滑岩の酋長古川アシカルは明治二十八年一月二十七日新冠産の体高四尺七寸、黒鹿毛七才の当時見積価格六十円と言われた駿馬一頭を軍馬として献納した。

その四……同月同日静内村でも左記の人々がそれぞれ馬種は不明だが各軍馬一頭を献納した。碧葉村渡辺伊平（価格四十五円） 別村藤沢佐右衛門（価格八十円） 下々方村金子忠蔵（価格百円）

左に日高馬市会社がその創業以後の馬市において驛売した馬数及び売価を掲げて価格変動の一斑を示すと次の通りである。

日高馬市累年馬匹糶売表

		牝馬				牡馬			
	騾売数	最高	最低	平均	騾売数	最高	最低	平均	
二十一年	七〇頭	二三、 _円 一〇錢	二、 _円 〇〇錢	四、 _円 六八錢	九四頭	二七、 _円 五〇錢	、 _円 四四錢	七、 _円 八三錢	
二十二年	七四	一九、五〇	三、五〇	七、六一	一四一	六一、〇〇	四、〇〇	一五、七二	
二十三年	八七	四一、〇〇	三、〇〇	八、四九	一五六	六〇、〇〇	三、〇〇	一五、六二	
二十四	三九	三五、〇〇	二、三三	二二、八八	九三	六五、〇〇	五、〇〇	二一、二一	
二十五	六四	三三、〇〇	四、〇〇	一四、一九	五六	三五、〇〇	二、〇〇	一六、〇九	
二十六	八八	四〇、〇〇	三、八〇	一四、三七	一〇九	六八、〇〇	四、〇〇	一九、二六	
二十七	一〇一	四〇、五〇	三、五〇	一三、七三	一六二	七八、〇〇	三、〇〇	一七、二九	
二十八	一〇〇	三八、〇〇	四、一〇	一六、〇五	一八九	六〇、〇〇	六、一〇	二一、三三	
二十九年	一六五	七一、〇〇	七、一〇	二七、一五	一二五	九五、〇〇	八、五〇	二九、四七	
三十	一七四	二二〇、〇〇	一三、〇〇	三六、〇四	三〇〇	七〇〇、〇〇	一一、〇〇	五九、六三	
三十一	一四四	一五〇、〇〇	一〇、〇〇	三四、三六	一四五	二二〇、〇〇	一一、〇〇	四九、四六	

備考 本表を通して平均価格を見ると、明治二十四年には明治二十一年の約三倍に高騰しているが、翌二十五年になると大暴落を来たし、このため会社が一時苦境に陥ったばかりでなく、産馬界に暗影を投じたと言われている。

しかし明治二十七年日清戦役が勃発すると、軍馬の買い上げが行われて再び高値を呼び、特に戦後は好況期を迎え三十年の如きは驚くべき高値となっている。

そして馬の販路について報文は次の如く述べている。

馬の販路は、本道内に在ては石狩其他諸国とし、本道外に在ては青森、秋田、宮城、福島^ノの諸県及び陸軍とす。或は馬市に於て

糶売し、或は時々来る所の需要者に売却す。其当国一ケ年收入蓋し数万円に達せん。」

ことに明治三十二年日高地方の馬數百頭が札幌地方に移出され、馬耕農業に大きく役立っている。また、『馬市は日高馬市会社、沙流馬市会社及び胆振国苫小牧馬市会社とす。その販路は年々拡張し、その価格は歲々騰貴し来り、明治三十年には非常に盛況なりしが、三十一年復た少しく衰へり、参考の爲日高馬市会社の本年耀売する所を示せば次の如し、そしてこの販売先は軍馬二十七頭、福島産馬組合八頭、宮城産馬組合四十七頭、青森県五頭、北海道諸国二百二頭にして福島、宮城、両産馬組合にては、其胤馬に供すと云う。

又、明治二十七年頃、門別村飯田信三を中心に同志を糾合して門別に沙流共同馬市を開いたが、三十一年の大洪水に災され、馬価の下落によつて予期の成績を挙げえなかつた。

さらに明治三十二年土藤其八、吉田半兵衛等の奔走によりアイヌも加え総勢三十名が一人づつ一円の出資金で共同馬市を開いたがこれが平取市場の始まりであつて盛況を極めたと伝えられる。翌三十三年には規模を拡大し売上げ、配当も上昇したが、三十五年沙流産牛馬組合が組織されると馬市は組合によつて行なわれるようになった。さらに明治三十年前後の日高の馬の飼育について、「馬は明治三十年末現在民有九、四九八頭にして沙流郡最も多く、幌泉、静内、浦河の三郡がこれに次ぎ山地多いため様似郡最も少し」と報文は誌しているが、これは次の地理的条件によるものとされている。

當國は高原丘陵に富み、且積雪少なく、冬期馬牛を放牧するも斃死する憂なきを以て、頗る牧畜に適するは、夙に世人の認むる所なり。乃ち沙流郡より浦河郡に至る地は、海岸より平均数里の間皆傾斜緩かなる高原丘陵にして、馬牛の放牧に適し、且其の奥は河川に沿ひ處々延長して又其適地を存す。御料牧場陸軍牧場用予定地、岩根牧場、赤心社牧場、その他多くの牧場此地にあり、様似郡は山地多くして牧牧適地少なし、幌泉郡は復た高原あり。幌泉産馬改良組合牧場最もその好き地位を占む

さて、日高において馬三十頭から百頭を有するものは五十五名、百頭乃至三百余頭を有するものは十名、十頭内外の所有者は枚挙にいとまのないほど多数である。このほかに新冠御料牧場には二千余頭が飼育されており牧馬の盛んなことは全道一である。馬の種類は内国種が最も多いが雑種もまた年々増加しており御料牧場の如きは既に四回雑種が生産されている。

参考(一)：新冠町史に誌すところによれば、明治十九年新冠の民有馬の頭数は次の通りで何れも内国種である。この年民有馬静内は

二、六〇五頭、沙流二、四五二頭、浦河一、二八五頭であった。

計	牝		牡		計
	当才	二才以上	当才	二才以上	
計	二〇六	一六九	三一	六六	二八六
					三六七

しかし、明治二十五年の新冠は次のように増加し、日高管内においては沙流・静内に次いで第三位。

種別	牝	牡	計
内国種	九三五	五八七	一、五三二
外国種	一四	一九	三三
雑種	三六六	一四三	五〇九
計	一、三二五	七四九	二、〇六四

参考〔〕：更に日清戦後の新冠の「馬の生産」状況は次の通りである。

	明治三十三年		明治三十四年		明治三十八年	
	牝	牡	牝	牡	牝	牡
内国種	二二二	一六〇	二三八	一八〇	二二〇	九五
雑種	五六	八二	五五	四八	一四	一六
外国種	、	、	、	、	二	二
計	二七七	二四二	二九三	二三八	二二六	一一三
合計	五一九	五二二	三三九			

(備考) 明治三十四年に十五頭、三十八年に四十八頭の斃死馬をだしている。
次に著名な牧場の概況を表示する。(明治三十年末現在)

牧場	創立年	地積	洋種	雑種	和種	計
新冠御料牧場	明治五年	一一五、三三四、六八二(坪)	三六	四九三	一、五九九	二、一二八
岩根牧場	明治十四年	一、六六六、一一〇	五	二二二	八八	三三五
赤心社牧場	明治十九年	三、〇三三、六〇二	二	八〇	一六四	二四六
横泉産馬改良組合牧場	明治二十三年	一、〇四五、七〇〇		一四四	一一	一五六
古川牧場	明治二十年	一、一四〇、〇〇〇	一	一五九	二五〇	四一〇

右の内岩根牧場、赤心社牧場は牛をも飼育した。
新冠御料牧場

新冠御料牧場は、前記の如く広大な地積を有していたから場内を一部に大別して、その一部には内国種牝馬を終年放牧し、これに内国種牡馬または雑種牡馬を放置して自由に交尾させた。他の一部には洋種または雑種、内国種を畜養したが、このうち洋種は常に

舎飼とし、内国種雜種を終年放牧とした。しかし子馬の離乳の季節には短期間だけ舎飼を行なった。しかもその部内は数多く区画されていた。つまり夏、秋、冬と順次にその場所を換えて放牧するためである。こうしてその経営は行き届いたものであった。また時々洋馬を購入しては、着々と改良をはかって良馬を生産し販売したため、一般の牧畜業者に利益を与えることが大きかった。

民間牧場

民間の牧場もまた、漸次進歩の途上にあつたけれども、その欠点は牧場の狭隘なことと、資本の欠乏にあつた。当時牧場の数は四十以上を数えたが、殆んどは十坪内外の小地積の所有にとどまり、百万坪以上のものは僅かに五牧場に過ぎなかった。またその畜数は概ね地積一万坪に対し三・四頭の割合とされており、従来のように天然草だけで飼育する場合は、馬一頭について一万坪以上の地積が必要であることは一般に認めるところである。しかし多年の濫放で草が蹂躪され著しくその発生をそなわれているので牧畜者はその牧場だけで満一年飼育することはできないから、官林その他適当な場所を求めて転牧を行つたため、往々にして農畑を侵し耕作者と紛糾を生ずることは免れなかった。従つて全然牧場のないのにかかわらず数多くの馬匹を杜有する者に至つては、その困難は一層甚だしかったから、その馬を十勝の原野等へ送つて放牧したものもあつた。しかし日高の牧畜者は概ね昔時は飼育が容易であつた関係から馬匹の繁殖ができたに過ぎない。

なお当時は實力は十分でなかったから、牧場の整理、種馬の購入、放牧の管理等すべてに欠ける点があつてその成績の見るべきものは僅かに二・三の牧場のみに過ぎなかった。

以上述べたような事情から各牧場とも今もなお天然草によつて馬牛を養うのが主で、飼料に供する穀菜、牧草の播種につとめるようなことはしなかった。新冠御料牧場でさえも、耕地、牧草地を合せて三十六万坪に過ぎないことを思えば、その他は推して知るべきである。牧草は「チモシー」が主であるが「レッドトップ」「オーチャードグラス」等が交つており、その一反歩の收穫は、新冠御料牧場内川岸の地で七十貫乃至八十貫匁であつたと言はれる。

(附) 明治四十年頃からは牧の作付面積も増大し、燕麥の栽培も多くなつて飼料は増産してきた。

さて、日清戦争後には日高産牛馬組合がはじめて設立され、一層馬匹の改良にのりだしたり、静内に日高産馬共進会が開かれたが、これは明治三十五年のことである。

四十年六月には、日高種馬牧場が設置された。これは馬政局主管で地積は一万町歩である。四十一年には中央種馬廠の札幌出張所

及び産牛馬組合連合会が設置され、四十二年には長万部種馬所、四十三年に十勝種馬牧場の設置を見るに至つて。更に四十四年皇太子殿下が新冠牧場に行啓になり、放牧とアイヌの調馬を台覧遊ばされた。

一方明治二十三年に道庁所有のトロッター種の種牡馬が釧路地方に貸与されたことを契機として、ようやく北海道各地に種牡馬の貸与が行なわれはじめた。

明治二十七年三石村大塚助吉がトロッター種豊平号の貸付をうけ育成に努め、それ以来軽種の飼育がさかんとなった。彼は明治十一年すでにに道より優良牡馬七星号、種牡馬タマボコ号の貸付をうけたり、自らは二十二年、仏国産種牡馬四頭を購入して馬種の改良に専念するとともに、日高産馬界の名声を一身に担つて立つた豊平号を育成したことは余りにも有名である。また同時に、種牡馬豊平号の日高産馬界に尽せる偉大な功績は特筆大書すべきである。即ち豊平号の血統は各地の競馬に出走し抜群の戦績を残した。

明治三十八年札幌競馬場の竣工を見て第一回の競馬が挙行された。当時の出場馬の多くは内国種でその大部分は日高産でありその優勝馬は主として新冠御料牧場産馬に任せていたのであつた。従つて札幌競馬はもっぱら新冠牧場産馬の競走の如き感があつた。しかるに俄然豊平号の産駒花園号という駿足が慧星の如く現われたため、本道競馬界はもろろ我が国競馬界に一大革命をもたらしたのである。

それ以来札幌競馬は豊平系馬匹の天下に帰したのである。こうして札幌競馬を大きく転換せしめ札幌競馬界はあたかも日高産馬の競走場であると同時にその優勝馬は豊平系が独占するという如き感を呈したのである。

明治四十四年八月、皇太子殿下本道行啓に際し、札幌秋季競馬を台覧あらせられたが、本桐号(豊平系大塚持馬)は従来の記録を破つて優勝し日高産馬の本領を遺憾なく發揮した。

日露戦争による軍馬の需要

日清戦争は、軍馬の需要を極度に増加せしめ、馬を生産、育成して販売し収益を得ることを目的とするいわゆる馬産経営を成立させる経済的な基盤を与えた。

このことは、大農牧場のみならず、一般の農家経営にも普及、滲透してゆき、それがまた以後の馬産の発展を支える基盤となつたのである。

このため数多くの市場が発生し、これを示す指標として馬の価格を見ると、日高市場の価格は明治中期から末期にかけて次表の通

り上昇の一途を辿り、殊に日清戦争後の高騰が目立っている。これは日清戦争後において、馬の販売市場が形造られたことを何よりも物語っている。

日高馬市 取引平均 価格	年代		明治二〇年	明治二五年	明治三〇年	明治三五年	「北海道畜産 一般」による
	平均	価格					
	六円四八銭	九円四八銭	四〇円八八銭	四六円九〇銭			

日露戦争勃発によって軍馬の需要が著しく増加した。明治三十八年静内、新冠の馬市の状況を見ると出場馬六九五頭、販売馬四四九頭、販売価格牝五三、九〇〇円、牡二七、六一七円で売上げ合計八一、五一七円となり、このことが農家をして一層馬の生産に力を入れさせることになった。

(新冠町史)

又静内町は日露戦争による軍馬購買に伴う影響により明治三十八年八九八頭に減じた。価格は静内町状態簿の市場成績表によると牝馬一頭平均百円、牡馬七十七円とあって、日清戦争時下に比べると牝馬が約六倍半牝馬が約三倍半の高騰を示している。このことが静内の畜熱を高めた。

(静内町史)

なお、軍馬の需要に関連して、特に去勢の必要が痛感され、種馬を除く明け三才の牡馬に対してはすべて去勢を実施することにした。

3 日高牛の実情

道庁設置後における牛の飼育については、種牛の貸与規則を制定してその改良繁殖をはかる方策をとり、二十七年には品種の統一を期するため真駒内牧牛場で牛の種類を純粋短角及びエアシャーの二種に決めた。

当時の日高牛は現在のように酪農経営を目的とした乳牛ではなかったから、殖民情況報文にも、「概ね短角種に係り、洋種と内国種とはその数僅少なり」とある。静内原條牧場においても、明治三十年には雑種牛八〇頭を飼育し、同年短角種牛三〇頭を市場で売却したというからその実状をほぼ知ることが出来るであろう。

しかし日高における当時の牛の数は、明治三十年末には、総計四五九頭でその所有者はおよそ十名前後であった。その中で牧場を所有する者は六名で、その所在地は赤心社が浦河郡に、岩根静一は沙流郡に、原条迂、山本高蔵は静内郡に、八田満次郎及び工藤

其八は沙流三石の二郡である。またその飼養方法は概ね種牛のみでこれは冬季間は舎飼にするが、普通牛は一年中放牧した。また、八田満次郎は夏期には沙流郡に放牧するが冬期になると三石郡に移すのを例としたと言う。

日高にえける牛の取引については、昭和二十年頃は、各牧場共大抵二才または三才の時は食用に供するため札幌やその他に販売し、その価格一頭につきおよそ二十五円乃至四十五円であったというが、特に日清・日露の両戦役を契機に馬の値段が高騰を見ると牛は一時衰退した。その取引は従来はもっぱら牛馬商や個人間の売買に限られていたが、四十三年に家畜市場法の制定を見ると牛はと、各地に家畜市場が設けられここで取引が行われる。

また、乳の需給について日高の牧場では明治三十年頃浦河及び幌泉において僅かに搾乳が行なわれて、その近傍に販売するに過ぎなかったと言われる。

さらに記録を辿れば浦河で三十四年雑種乳牛三頭で牛乳九石を搾乳、三六〇円の収入をあげ、三十八年静内で乳牛三頭で五石を搾乳二〇〇円の収入のあったことがわかるし、荻伏赤心社が肉牛の収入見込が薄いため乳牛の飼養に方針を改めて三十六年ホルスタイン種牝牛二頭を購入して乳牛の生産を計った。いずれにしても酪農の基盤はこうした段階から次第に培われていったのである。

4 日高牧畜の前途

(視北海道殖民状況報文)

当時における日高牧畜業の一端を知るものとして北海道殖民状況報文には次のとおり記されている。「現在の牧場地積に於て、将来大いに畜数を増加し得べきは、唯新冠御料牧場のみ、民有牧場の多くは、畜数を増殖する能はさるのみならず、却て之を減せざるを得ざる有様なりと虽とも、官林地内に尚牧場適地少なからざる以て、森林養護に差支なき限りは、或は有償、或は無償にて貸附し、然次牧場を拡張するを得た。

然れども、農耕の進歩と、山林の取締とは、次第に牧場外の放牧を制限し、従って牧場なきものは、終に馬牛を飼養し能はずして、之を売却し去り、若くは他国に移牧せざるを得ざるに至るべく、又牧場所有者中にも、その畜数を減せざるを得ざるものあらん。且牧棚の完備、飼料の耕種管理の手数等其の経費年を逐うて増加し、従前の如き疎放の思想を脱せざる牧畜者は、皆失敗し、将来能く外困の事情に適応して、改良進取する人のみその業を維持して益々盛大に至るべし。

想うに今後馬牛の需要は、一般に増加し、その良種は遠く本道外に輸出して、益々販路を拡張するを得るが故に、当国の如き土地、氣候両つながらその宜しきを得るに於ては、牧業の前途望ありと謂うべし、乱放濫飼の時期は將に去らんとす。今後の要務は唯整理